

古 典 語 ノ 一 ト (一)

清 水 文 雄

古代文学に現われた「世」「世の中」「世間」の語の意義を調べているうちに、つぎのような用例に出会った。いずれも万葉集所収のもので、大伴旅人の歌を筆頭とする、神亀・天平の頃の詠である。

(1)余能奈可は空しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり
(卷五・七九三)

(2)世間を常なきものと今ぞ知る、平城の京師の移ろふ見れば(卷六・一〇四五)

(3)うつせみの代は常なしと知る、ものを秋風寒み思ひつるかも(卷三・四六五)

(4)世間の常なきことは知るらむを情尽すな丈夫にして(卷十九・四二一六)

「世間」が二つあるが、どちらもここでは「ヨノナカ」の訓が与えられている。

まず(1)であるが、この歌には、「大室帥大伴卿の凶問に報ふる歌一首」の題詞と、「禍故重疊し、凶問累集す。永く崩心の悲しびを懷き、独り断腸の泣を流す。但、両君の大助に依り、傾命纒に継ぐのみ。筆を尽さぬは、古今嘆く所なり。」の詞書がついている。

「禍故」は不幸の意であるが、左注に「神亀五年六月二十三日」の日付があるところから、任地大宰府で愛妻を喪ったことなどをさすものと思われる。「凶問」は井上通泰博士の説に従って、凶事に関する知らせの意にとつておく。

さて、「余能奈可は空しきもの」は、「世間虚仮」の観念を心において言ったことばであろう。上宮法王帝説所引の天寿国續帳銘に、「世間虚仮、唯仏是真」と見えており、聖徳太子の思想を表わした詞句であるが、太子は「世間無常」という仏教哲学の根本命題を、このように受けとめていられたものと想像される。太子の薨去を推古天皇三十年(六二二)とする説(法隆寺金堂釈迦仏造記・天寿国續帳銘)に従うと、神亀五年(七二八)までには百年余りの時が流れている。旅人は禍故・凶問しきりに至り、崩心・断腸の思いに堪えないでいるとき、すでにいくたびか目にし耳にしたと思われ「世間虚仮」という詞句の表わす観念を、今こそ身にしみて痛感したのである。別の言い方をすれば、悲愁の情感を誘う事実が、「世間虚仮」の観念の照射を受けて、いよいよ悲痛堪えないものになったのである。なお「知る」とは、ここでは先哲が顕示した人生の知恵を身をもって了得することをいう。

(2)の歌は、「寧楽の京の荒れたる墟を傷み惜しみて作る歌三首」のなかの一首で、作者未詳となっているが、天平十三年(七四一)に都が山城の久邇に遷された後の詠であることは明らかである。歌意は、「世間無常」の道理が、改めて身にしみて痛感されることだ、あの立派であった奈良の都が日増しに荒れゆく様を見ると、とうとうである。旅人の歌の下の句に見られるような、あらわな情感の吐露はないとしても、「……今ぞ知る」のなかに、哀切な抒情のひびきを聞くことができる。「世間虚仮—「世間無常」の道理が、それを「知る」ことによって、改めて情感の流れに深いかかわりを持ってくる点において、旅人の歌と同じ発想に出るものということができる。

(3)(4)の歌はともに大伴家持の詠である。天平十一年(七三九)六月に愛妾を喪い、「今よりは秋風寒く吹きなむをいかにか独り長き夜を宿む」(四六二)「秋さらば見つつ偲へと妹が植ゑし屋前の石竹花咲きにけるかも」(四六四)と挽歌を歌いつづけた青年家持が、七月に入ってから、「秋風を悲しび嘆きて」詠んだのが(3)の歌である。この世は無常なものであるとは知っているはずなのに、秋風の寒いにつけて亡き人を恋い偲ぶ情に堪えないことだ、の意である。「世間無常」の観念が了得されているにかかわらず、悲しみを抑えることができない、というのである。前の二首では、情感が観念の照射を受けて、抒情に哀切のひびきを加えるのを見たのであるが、この歌では、情感が観念を裏切ることによって、ひたぶるな抒情に徹しようとしているのを知る。(4)の歌は、家持の越中守時代の詠である。天平勝宝二年(七五〇)五月二十七日、慈母を喪った藤原二郎を悼んだもので、発想は(3)と同じである。情を尽して嘆く友

に対して、「世間無常」の道理を知っているはずであるのに、と激励してやった歌である。

永生と常住を願うのは人間の至情であるが、「世間無常」「世間虚仮」の観念は、明らかにその否定の上に成り立っている。したがって、情感と観念とは、もともと二律背反的關係にあるものといふことができる。その照射を得るにせよ、それを裏切るにせよ、短歌の抒情の世界に既成の観念や思想をかかわらせる方法を、万葉人の実作の上に見てきたわけである。そして、たとえば、無常観を単に無常観として詠んだ歌が、高度の詩的結晶に達しえないことを思えば、和歌世界への「思想」の関与の仕方としては、けっきょく右の二通りしか考えられないような気がする。

(本学教授・文学博士)